

S2-6 吸入麻酔療法と気管支喘息重積発作

昭和大学藤が丘病院救急医学科

刑部義美 高橋愛樹 成原健太郎

目的：ネオフィリンや $\beta 2$ -刺激薬の気管支拡張剤、さらには抗炎症薬としての副腎皮質ステロイドホルモン剤（以下ス剤）などの薬物使用によっても改善しない、気管内挿管を必要とする重症喘息に対して、イソフルレンの吸入麻酔薬が使用され有用性がありとの報告がある。今回、当センターでもイソフルレンの有用性を検討すべく96年4月から99年3月の3年間、重症喘息発作で入院した症例に対して、吸入麻酔薬を使用した群（以下使用群とする）と使用しなかった群（以下非使用群とする）に分けて、イソフルレンの有用性の検討を行った。

検討内容は救命センター在室日数、人工呼吸管理の日数、ステロイド剤（以下ス剤とする）の使用量、合併症の有無、転帰などの項目で行った。

結果：対象は重症喘息のうち96年4月から99年3月の3年間に、吸入麻酔薬を使用した群、5症例（年齢は31.6歳）、吸入麻酔薬を使用しなかった非使用群、5症例（年齢は31.2歳）で検討を行った。使用群と非使用群の性差は使用群は男性2例、女性3例、非使用群は男性4例、女性1例であった。入院前の重症度では両群共に軽症例が多かった。

病型分類では両群共にアトピー型が80%であった。

入院前の外来受診状況は、両群共に不定期受診例が80%であった。

センター在室日数では使用群は平均で13.4日間、非使用群は25.0日間と有意に使用群の方が短期間であった。

呼吸管理の日数も使用群は平均で14.4日間、非使用群は20.0日間と有意に使用群

の方が短期間であった。

治療で使用したス剤の総投与量の検討では、使用群は平均で58.8mg、非使用群は107.8mgで、使用群の方が有意に少量で、また突然の気道内圧上昇時に使用したメチルプレドニゾロン量でも使用群は平均0.88g、非使用群は6.6gで、有意に使用群の方が少なかった。

ス剤による副作用の出現はsteroidmyopathyと思われる症状は使用群では20%、非使用群では80%であった。

転帰の検討では両群ともに死亡例はなかった。

考察：吸入麻酔薬を使用する優位性として①センター在室期間、人工呼吸管理期間の短縮で患者の精神的苦痛及び薬剤からの負担軽減と高額な医療費の減額。②ス剤が減量されsteroidmyopathyの発生低下から、早期にセンターから退室が可能となりセンターのベッド効率改善などの利点が上げられ、結果的に転帰は同じであっても使用群に優位性を示唆する結果となった。

まとめ：今後は麻酔薬の投与及び中止時期の検討が必要と思われた。